

Title	ピューリタニズムの起源 : L・J・トリネリユードの見解をめぐって
Sub Title	
Author	上山, 雄治(Kamiyama, Yuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.126(624)- 127(625)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。本論文ではこのテーマ発生論争の一端を紹介する。

十九世紀イギリス実証主義運動に関する一考察

森 淳 子

フランスでの実証主義は、十九世紀のなかば頃からイギリスにひろまったが、この点で大きな役割を果たした John Stuart Mill の思想(一八〇六一一八七三)を Auguste Comte (一七九八一八五七)とのかかわり合いから述べ、更にこのようにしてイギリスに入ってきた実証主義の思想と運動、特に Oxford の Wadham College における Richard Congreve, (一八一八一八九九) E. S. Beesly (一八三一—一九一四), J. H. Bridges (一八三二—一九〇六), F. Harrison (一八三一—一九二三) (彼らの殆どは、宗教的には evangelical の要素を強くもつものであるが)等を中心としたイギリス実証主義の運動を、一八六〇・七〇年代イギリスの社会的・政治的な動きとの関連から考察したものである。

彼等が主張する問題に関しては、主として、Fortnightly Review 及び彼等の雑誌 Positivist Review のなかの論文等を参照した。

ピューリタニズムの起源

— L. J. トリネリユードの見解をめぐって —

上山 雄 治

ピューリタニズムの本質と起源についての伝統的な解釈は、メリー治下に迫害された英国のプロテスタントたちが大陸に亡命し、ジュネーヴのカルヴィンによる改革の成果を見、エリザベス登位と共に帰国した時それにならつたもので、本質的にはカルヴィニズム特にその中核にある「予定説」こそピューリタニズムを特色づけるとする。

それに対し重要な反論が試みられた。マコーミック神学校の教会史学者 L. J. トリネリユードはペリー・ミラーに示唆を得てピューリタニズムの神学の本質は「契約神学」であるとし、その系譜をたずねることにより起源をきわめ得るとした。文献的にはウィリアム・ティンダルが最初だが、これはもともと英国土着のもので世俗的にはコモンロー、宗教的には「オーガスタニズム」の伝統の中に存していた。もし神学的な関連を大陸に求めるならそれはライオンランドの改革派の神学である。彼はこの見解を「The Origins of Puritanism, Church History XX, The American Society of Church History, 1951」で発表した。

彼はピューリタニズムの英国土着性と、大陸との関係においてカルヴィンと断絶するという二重の仕方で通説を否認しているが既に有力な学説となつている。彼のこうした見解を最初に我が国で紹介したのは東神大の大木英夫氏で「同大学神学会編『神学』XXIII, XXV (1963), XXVI (1964)で「ピューリタンの契約神学」として発表された。

本論文はトリネリユードの論旨の紹介と批判であり、大木英夫

氏の見解にそつてできるだけその妥当性と問題点とを確かめたものである。

昭和四十三年夏季見学旅行記

恒例の史学科見学旅行は東北方面で七月一日より五日まで行われた。一行は国史専攻から河北展生、志水正司、鈴木公雄、西洋史専攻から鈴木泰平、東洋史専攻から江坂輝弥の各先生方と学生三十四名であつたが、見学旅行としてかなり充実したものであつた。

七月一日

上野駅七時四十分発「第一みちのく」に乗り、午後一時過ぎ仙台に到着、さつそくバスで小雨の中を最初の見学地陸奥国分寺跡に向つた。国分寺跡に向うバス内でこの旅行中はじめの二日間、仙台附近の史跡を案内して下さる東北大学の高橋富雄先生が紹介された。高橋先生の説明により、武蔵国分寺につぐ大きさであると思われている陸奥国分寺跡、八練権現造りの典型的な豪華さを見せる桃山造りの大崎八幡神社、その別当寺である竜宝寺に安置されている釈迦如来像を見学する。大崎八幡神社は現在漆のぬりかえ工事が行われており、斗拱間の墓股に彫られた彫刻や彩画は過去の華やかさを取りもどしつつあつた。竜宝寺釈迦如来像は京都嵯峨清涼寺の本尊と同形式で特徴ある彫刻である。

一日目の見学日程を終え第一の宿泊地仙台の旅館に着き、江坂先生の紹介により、希望者は東北大学の考古学研究室を見学する。

東北は考古学の宝庫といわれ、東北大学はその中心とあつて資料を整理する設備はかなり整つていた。この間、雨は降りやまず二日目の天候もあまり期待できなかった。

七月二日。八時半、小雨降る中を高崎廢寺跡に向けて出発。昨日と同様、高橋富雄先生の説明を伺いながら、整備された廢寺址の伽藍配置を見学し、事務所で重弁蓮華文、重小文軒瓦の拓本などをを見せていただいた。次にその成立年代天平宝字六年に多少の疑問を含んでいる多賀城碑、そして陸奥の都とも言われる多賀城跡を見学する。多賀城は東北開拓の根拠地として奈良時代から南北朝に至るまで国衛・鎮守府・按察使の三種の官庁を兼ね備え、そのプランも実用的に配された朝堂院風のものであつた。あいにくの雨にもかかわらず高橋先生の精力的な説明を伺いさらに正殿跡や土壘などを眼のあたりにして多賀城さらには柵城というものに対して認識を深めることができた。

午後からは志水先生に説明していただきながら松島周辺を見学した。まず伊達政宗創建の建物中最古の五大堂。これは単層宝形造本瓦葺で桃山時代の雄健な感じがよく出ており、またそれぞれ十二支の彫刻が施された墓股がおもしろい。次いで老杉に囲まれた瑞巖寺本堂は、乙字型の玄関を有し、上段の間、文王の間等善美を尽した各部室、彫刻、彩色等に、いかにも桃山時代の雄壮さと、当寺の格式の高さが感じられた。伊達光宗の露廟であつた円通院の内部には家形厨子が安置せられ、漆胡粉、金箔押金が精巧をきわめ、図案に切支丹文化が大胆に取り扱われている点、い